

2022年4月号

ニュースナビ

ケアの家族責任が招いた子殺し事件

佛教大学 田中智子 (たなか ともこ)

新型コロナの一斉自粛が明けた2020年7月にあるシングルマザーが、障害のある高校生の息子を手にかけた事件の裁判に足を運びました。傍聴を通じて、事件の背景として、障害のある子どものケアの第一義的責任が家族に課せられている問題は大きいと思いました。

障害児を支える資源の量的不足と埋め込まれた家族のケア役割

今回の被害者である息子は、高校2年生であり、高等部卒業以降の進路について実習などにとりくんでいる時期でした。学校の取り決めでは、子どもを連れての事業所見学は3ヵ所となっていたようで、事件が起こったのは2ヵ所目の事業所見学に行った日の深夜でした。見学に行った事業所は、定員に空きが無かったり、息子さんの特性に対応していなかったり、送迎が無かったりと希望にかなうものではありませんでした。学校からは、実習希望施設を記入する用紙は、白紙の状態配布され、保護者が施設を探して書くことが必要であり、希望先をどこも記入しなかった場合は、学校側が適宜選んだ施設が書かれるとのことでした。

そもそも、子どもにとって最善の進路を親が選ぶということは可能なのでしょうか？ 誰しもが家庭の内と外で見せる顔は異なりますし、わが子の状況を客観的に判断するというのはと

てもむずかしいことです。加えて、地域に存在する多様な成人期施設の特性を知り、子どもに合ったところを選択するということは、幅広いネットワークと経験の蓄積が求められる専門的な作業であり、親が担うのはむずかしく、不適切なことと考えられます。

公的な支えがあってこそその家族の生活のはずなのに…

本事件の親子は、生活保護を受給していました。つまりは、1ヵ月に1回程度は生活保護のケースワーカーによる生活状況の聞き取りがなされていたはずですが、事件が起こる数年前から、母親は精神的に追い込まれていき、通院が長期間できておらず精神状況が悪化し、大幅に体重が減少するなどの身体的な変化も生じており、定期的に会っていたならそういった変化に気づいていたはずですが、裁判のなかでは、生活保護のケースワーカーとのやりとりは取りあげられなかったため、事実不明ですが、ショートステイの優先利用や入所施設への措置など、緊急的な介入が必要だったと思われる。しかし、そういう対応はされませんでした。

また、担任の教師が、陳述書のなかで、祖母の介護をしていることは知っていたが、同居をしているかどうかまでは知らなかったと述べています。もちろん教師にとっては、子どもの教



第2回「子どもと親のSOSをキャッチする仕組みを考える」シンポジウム (2021年9月14日 京都新聞)

育がその役割ではありますが、学校が、学齢期の子どもたちを支える第一義的な公的機関である以上、その背景にある家族の状況を把握するのも重要だと考えます。さらには、学校の面談で子どもの将来を相談したときに、福祉事務所に相談するように言われたとのこと。精神的に追い詰められた母親が新たな相談機関に向くというのはとてもむずかしいことだと言えます。まさに機関連携を発揮すべき局面だったと思います。

公的な支えが無いなかで生活を送るというのは、セーフティーネットが張られていない状況で綱渡りをしているのと同じ状況です。SOSに誰も気づいてくれない、どこも助けてくれないという不安のなかで、母親が閉塞感を強めていったことは想像に難しくありません。

思い描く人生との乖離

裁判には、小学校時代のママ友からの陳述書なども提出されました。母親は、周囲に対する面倒見がよく、頼りになる存在であり、子どもにたいする愛情の深い、とても養育に熱心な母親と認識されていたようです。おそらく子どもが小さい頃は、子どもに最適な療育や教育を求めて熱心に勉強し、周囲とも協力し合いながら子育てをし、子どもに障害がありながらも(あるからこそ?) 一生懸命、自立に向けて育てて

いこうとされていたのではないかと思います。

しかしながら、実際には、体力的に自分を上回ってきた子どもにうまく対応できない、子どもにとって良い場を探そうと思ってもみつからない、ケアが必要となった祖母との折り合いがつかないなど、日常のあらゆる場面で、これまで思い描いてきた人生と乖離があり、修正しようと思っても理解者や支援が乏しいなかで、ほかの選択肢がみつからず、絶望と孤立感を深めていったことは容易に想像できます。もちろん誰しもが、自分の人生予定通りにいくとは限りませんが、困難を乗り越えるには、“溜め”(社会活動家の湯浅誠さんが、『反貧困』(岩波新書)のなかで、困難に陥ったときに助けてくれる家族や友人、制度や資源などを指して使った言葉です)が必要ですが、本事件の母親にはそれが無かったのだと思います。

*

京都では、この事件をきっかけに保護者や関係者が集まって、定期的に集まりやシンポジウムなどを開催しています。そこでもどうすれば良かったのか…明確な答えはみつかりませんが、考え続けることに意味があるのだと思っています。少しずつですが、仲間の輪も広がってきました。まずは身近なところに“溜め”をつくっていくことが重要だと思います。